

平成 23 年度 秋の企画展

「水無瀬駒の時代を生きた人びと」

講演「江戸時代の将棋駒」

—高槻城三の丸跡の出土駒—

平成 23 年 11 月 26 日（土）

高槻市教育委員会文化財課

しろあと歴史館長 鐘ヶ江 一朗 氏



みなさんこんにちは。高槻市教育委員会の文化財課長をしております、鐘ヶ江と申します。しろあと歴史館の館長もしております。

さて、今日お話をいたしますのは「高槻城三の丸跡から出土しました江戸時代の将棋の駒」これがテーマです。

そもそも高槻にお城があったということは皆さんご存知だと思いますが、現在、地上に高槻城の遺構はほとんどありません。城内、三の丸の一画に野見神社があって、今回ご紹介するのはこの野見神社のすぐ北側にあたる一角を発掘した、そのときのお話です。

本題の将棋の駒は、この野見神社に一番近いところから見つかりました。2500 平米掘って、井戸が 61 基出てきました。将棋の駒が出てきた井戸は、井戸 41 と呼んでおります。これは井戸枠を全部抜いて、そのあとの穴に、いわゆるゴミというんでしょうか、日常用具、不用品やこわれたものをまとめて捨てていた、こういう井戸跡です。白っぽい陶磁器や赤っぽい土師皿、いわゆる灯明皿の類です。これらがざっと 50 点くらいこの井戸から出たわけです。上層に土器が捨ててあって、それらを取り上げつつ掘り下げていきますと、深い井戸の底に近いほうに木製品がまとまって出てきました。

で、目をひいたのは、金箔を貼り付けた板が出てきました。その金箔でありますとか彫刻刀みたいなものでありますとか、あるいは刀の柄、それから木箱、そして付け札、これがたくさん出てきました。こういう付け札類に混じって、薄板を竹で留めて作った木箱が捨ててありました。長年、土と一緒に埋まっていたものですから、部分的に変色したり、どうも鉛のような金属がへばりついたような痕もありました。ざっと 200 年以上経ったものですが、こういったものが見つかっています。そして、土を篩にかけて洗っていくと将棋の駒が出てきました。

発見しました将棋の駒、これは全部で 26 点。このうち墨で、あるいは漆で書いてある書き駒が 26 点のうちの 2 点、残りは全部、彫刻刀で彫り込んだ後に墨を入れてあります。そういうものでした。形や大きさは、今の将棋とほとんど一緒です。ただ、この中の「王将」とか「金将」とか、こういったものを見ていただきますと、いびつな断面形をしております。これは土に埋まっていた影響もあるのかもしれません、非常に手作りのにおいがする駒が混じっています。字体も結構ばらつきがあります。特に書き駒は、漆で書いてあって、漆に光が反射して白く見えるんですが、黒漆で「と金」ですね。「歩」と書いたものがあります。もう 1 点は墨で書いてあるということで、

どうもお店で買い求めたものとは思えない、使っている間になくした駒を自分で作ったり、あるいはよそのセットから持ち込んだり、こんなことがあったんじゃないかなということを思わせる 26 枚です。特に最初申し上げた「王将」や「金将」などの成らない駒については、字が刻んである方が反っていたりします。ですから、きちんと五角形の駒にする手間を省いたといいますか、手元にあった木材を利用して作ったと思われます。さらに、いかにも流通していると思われるしっかりした将棋駒に混じって、親指の爪ぐらいの大きさの薄板が最初 2 枚ほど出てきました。駒の形はしているので、これも将棋駒の一つかと思って、丁寧に筆で泥を落としていきますと、墨で「歩」、あるいは最初は何と読むかわからませんでしたが、とにかく墨書したものが出てきました。その中には、赤い点や線を引いてあるものがありました。写真ではちょっとわかりにくくて恐縮ですが、図面では、字に重なる形で、線や点を表しています。発掘した後で、これが中将棋の駒だったということを知って、それから駒の動きなどを教えてもらうと、2 駒 3 駒進める、あるいは突き当りまで進めるような駒はラインが引いてあって、斜めに一つ動ける、それは点で印してあります。サイズが、親指の爪ぐらいの小さいものです。しかも、弁当の折箱みたいな薄い木材を使って、小刀で削り出して作っています。これはどう見ても自作品で、一生懸命探しましたが、全部で 21 点、これきりです。その 21 点の中で、中将棋の駒の名称の推測がついたのが 10 点、あの 11 点については、わずかに朱点は残ってはいたものの、墨書は残っていなかったので、駒の名称を特定するには至っていない状況です。

普通、駒の進め方を駒自体に書くということはないと思うのですが、おそらく今ほどではないにしても、江戸時代はすでに中将棋が指されることが少なかつたです。そこで、将棋本などを参考にしながら、中将棋の初心者同士が指すために作ったんじゃないのかなと思っています。みなさんご承知のように、中将棋というのは敵味方合わせて 92 枚、マス目は 12×12 、将棋盤自体も特製のものがいるわけですが、駒のサイズからしますと、碁盤を使って中将棋したのかなと、碁盤のマス目の大きさに合わせて、小さい駒を作ったのかなと思っております。碁盤は出でていませんが、碁石は出土していますので、あながち無理な想像でもないと感じております。

江戸時代は、もっぱら今の将棋が指されていて、中将棋、さらには大将棋、大々将棋というバリエーションがあるわけですが、そういう時間がかかる遊びは、ほとんどなされてなかったです。僧侶や武士の、しかも一部の人々が、中将棋を指していた状況であったと考えられます。この中将棋と将棋の駒が発見された場所は、武家屋敷のエリアですので、お武家さんが勤務の合間に、中将棋の駒を自作してまで遊んでいたのかなというふうに想像もふくらみます。

このときの発掘では、人々の精神生活や年中行事を偲ばせる遺品、羽子板や人形、釉のかかった鶴、はと笛、ベーゴマ、安産のお守りの犬の土人形なども発見されております。

これら高槻城の発掘成果一端は、しろあと歴史館で紹介しておりますので、ぜひともお越しいただき、ご覧下さいますようお願い申しあげて、結びといたします。本日はどうもありがとうございました。